大谷學報　第九卷　第一號

佛教文化の世俗化

橋川　正

一

近來佛教文化なる語が屢々用ひられるが、その概念內容は必ずしも一定せず、これを用ふる人や場合によつて種々の差別が存するやうである。中には佛教と佛教文化との區別もなく同樣にこれを使用するがために、概念の混亂に陷る場合もないではない。私は概念の吟味決定に沒頭しようとする意志を有しないけれども、語が異る以上そこに區別を設けることが至當であり便利であると信ずるから、初めにこの點を聊か明かにしておきたいと思ふ。私は佛教の構成要素を以て佛法僧の三寶なりとし、これが精神的、社會的、物質的の三方面の人文と結合して、こゝに佛教文化の現象を認め得ることは、簡單ながら嘗て述べたことがある(大正十四年刊、日本佛教と社會事業序)。私は佛教と佛教文化とを明かに區別し、隨つて佛教史と佛教文化史とが夫々內容を異にするものと考へるのである。

次にこれを少しく分析して說明を加へるとすれば、佛教の有する文化價値が宗教としての「聖」

でなければならぬことは普通に考へ說かれる所である。即ち佛法寶の三者共に「聖」なる價値を有すべきである。所がこの「聖」なる價値を有する佛教と一般的な文化價値と結びついた佛教文化なるものは、「聖」なるものと「聖」ならざるものとより構成される譯である。而して「聖」ならざるものとは換言すれば世俗的なもの (profan) である。かくの如く、佛教文化はそれ自身の中に本來 Profan の要素を保有するのである。卽ち heilig の要素と profan の要素の均勢の上にはじめて佛教文化は成立するのであるが、この均勢が一度破れて profan の要素が優勢となり强力に働くやうになるとこゝに佛教文化の世俗化 Profanierung, Profanation なる現象が起つて來るのである。

佛教の傳播に伴ふて夫々の國民或ひは民族の文化と結合し、一旦佛教文化が成立した曉に於て、やがてその世俗化を見ることは、何れの時代何れの土地に於ても選びはない。佛教文化の誕生の行はれる他の一面に於てその退化即ち世俗化を見ることは、自然の數といはねばならぬであらう。佛教文化の姿の上にも成住壞空の四相を見得る譯である。畢竟私はその壞空の相を世俗化と名づけたに過ぎない。

今その世俗化の過程を考へて見るのに、先づその「聖」なる要素が衰微頽廢して、內容に於ける變化を來すが、形式だけはなほ殘存する。かくして佛教文化の形式的方面だけが殘されて、その相はありし日の如くであるが、その精神その本質は失はれてしまふ。かくしてその極佛教文化は全く

二五

世俗文化の裡に沒入して行くのである。

二

右に述べたやうな佛教文化の世俗化が最も著しく惹起した例を、私はわが國の場合に於て中世から近世への推移の間に觀取するのである。日本の中世文化と近世文化との相違はもとより種々の見解から見られるであらうが、私はその特質を考察する上からいつても、この點は見逃すことの出來ぬ一つの主要な觀點であると思ふ。私は佛教文化の世俗化を考察する一例として見ようと思ふが、同時に日本文化の變遷發達上からも亦注意を要するであらう。

安土桃山時代――それはわが中世から近世への眼まぐろしい過渡の時代で、世相遷流の波瀾は急流激端の姿を呈し千變萬化を極めたが、私は便宜上織田信長の上洛した永祿十一年を以てその初めとなし、豊太閤が「難波の夢は夢の又夢」の辭世一首に哀れを止めて薨じた慶長三年を以てその終となし、次いでわが近世の幕が開かれたと見ておくことにする。この前後の時期に於ける文化の推移を觀察すれば、佛教文化は著しく世俗化して既に昔日の觀なく、これに代つて儒學文化勃興の機運が次第に濃かになつて來た。卽ち宗教的であつた佛教文化が衰へ、これに代つて學問の進運が現はれて來たのである。

元龜四年七月、信長が京都市民に下した定書の第五條に「儒道之學に心を碎き國家を正さんと深

く志を勵す者、或者忠烈之者、尤大切なる事候條、下行等他に異而可二相計一」といふが(當代記)、爲政者の示した方針によるとはいへ、爲政者自身が逸早くこの推移に氣づいて時代を指導したとも見るべきであらう。下行とは扶持を與へることで卽ち儒學の奬勵を計つたのであるが、信長のみならず、各地の大名領内に於てもこの傾向は見ねそめてゐるのである。更に興味のあるのは前身僧侶であつたものが、中年から還俗して儒者になつてゐることである。最も有名な人物でいへば藤原惺窩の如きがある。惺窩は參議藤原爲純の子といふが、若年にして出家して相國寺に入り、名を蕣といひ妙壽院と號したが、關ヶ原役後、德川家康は屢々京都に入つて惺窩を請じた。そこで惺窩は儒服入見して經史を講說するに至つた(元和五年九月卒去、壽五十九歳)。

かくの如き經歷を有する惺窩が佛敎を評して「今時の出家たち、財寶を積み貯へ、堂宇に金銀を鏤め、綾錦を身に纏ひて、祈り祈禱をなして、後世を助けんと云ひて、人の心を迷はする事、佛の本意にもあらず、まして神道の心にもかなはず、世の妨げとなるものは出家の道なり」といつてゐる(千代もと草)。惺窩自ら敎界の裏面を熟知してゐたからであるが、時代の開展を偲ばしめるに十分である。かつて夢窓國師疎石によつて剃頭の俗人と呼ばれた禪林五山の僧徒の行衞はかくの如き徑路を辿つたのである。畢竟剃頭の俗人が一轉して蓄髮衣冠の俗人に變つてしまつたのである。

室町時代の文學として俳諧連歌の有する特色は田田孝雄氏によつて說かれたこともあるが（思想日本文化研究號）、この方面について注意を拂ふならば既に守武の獨吟千句に

祕佛とてひするにたれかまゐるらん

といふやうな、祕佛に對する輕侮的態度が示されてゐる。拙作の佛像の前には斗帳を懸けて餘り人目に觸れぬやうにするがよいといつた（古今著聞集）、中世の思想と比べて隔世の感も餘りに甚しいではないか。かくの如き佛敎に對する輕侮嘲笑の表現は、宗鑑の新撰犬筑波にも少くない。たとへば、

あはれにもこゆるかやりのしでの山
　ほとけもけんくわするとこそきけ

釋迦はやりみだは利けんを拔もちて
　うはへぐすりをさせるたゞれ目

來迎の阿彌陀は雲をふみはづし
　むさしをさしてとんでこそゆけ

×

高野の大しなのみのこれり

くふかひのしよひかぶらを分にして

×

ほとけもものをおひたまふかな

嵯峨の釋迦しやくせんだんと聞柄に

の如きを指摘することが出來る。新撰犬筑波は享祿四年若しくは天文十八年の撰集と考へられるがその佛敎の神聖冒瀆の傾向からいへば既に中世的精神を離說して近世に近づきつゝあることを示すものといつてよい。僧侶の無智に題材を取りその時代遲れを嘲けつたものは狂言文學の中にもあるがこれ又同一の傾向を示すといつてよいであらう（拙著日本佛敎文化史の研究所收、日本佛敎史の背景より見たる性欲問題一二）。

更に眼を轉じて美術の方面を見るに、佛敎美術世俗化の迹に接することが出來る。たとへば京都本法寺に藏する中文殊左右寒山拾得像の畫幅は、中幅は啓牧、兩幅は啓孫の筆といはれるが、形式からいへば明かに佛敎の三尊の樣式を踏襲したものである。然るに中幅が文珠像であるのに、左右兩幅は俗衣を著けた寒山拾得で、世俗的要素が濃厚に加はつてゐる。同樣に島津公爵家藏の啓孫筆六祖及花鳥圖を擧げることが出來る。これは中幅が六祖慧獨の像で、その左右は枯木と綬帶鳥の圖で信仰の對象たる性質を失つて全く鑑賞の美術に變化したことを語つてゐる。この種の圖の先容を

なすものとして大德寺藏の中觀音左右猿鶴圖を擧げ得るであらう。これは牧溪の畫蹟として信憑するに足るもので、室町時代の水墨畫に刺戟を與へた遺品の一つであるが、三尊の形式を備へながら左右幅を占めるのは禽獸の圖である。これらの畫はわが佛敎美術が世俗美術に移り行く過渡的段階の經過を雄辯に示すのである。これらの三幅對に於てなほ中幅のみ佛敎の名殘を留めてゐるが、更に世俗化の度を加へて中幅にも世俗の人物山水花鳥の圖が描かれるに至り、江戸時代の狩野派が好んで描いた聖賢、耕織、忠孝等、儒學に因んだ題材に變化するのである。

この過程は足利歷代の將軍の諡號が、等持院、慈照院、鹿苑院等といふやうな佛敎に因んだものであつたのが、德川氏に於いては大猷院、常憲院、有德院等の如き儒學に關係のある諡號に變化したのと全く並行一致するものといはねばならぬ。

なほ美術に於て特に著しくこの點の見られるのは浮世繪であつて、既に姉崎正治氏が米國で出版された"Buddhist Art"の中に指摘された通りである。即ち圖版第四十四の勝川春章筆の普賢圖(千蔭賛)、第四十五の同じく春章筆の寒山拾圖の如きで、何れも現在ボストン博物館の有に歸してゐる。この圖の解說として氏のいふ所は、

The human figures of manifold attitudes were transformed to the uses of worldly life. A temporal form of the god of wisdom has already been referred to, and I can add many other

examples of similar sort, such as Daruma soothed by a woman, or the Rakan at play. These are cases in which a secularization of Buddhist art is indeed apparent, but the process was carried so far by the later genre painters that Fugen came to be represented as a courtesan reading a love letter (Pl. XLIV), and Kwnnon as a maid coming from the market with her basket of fish. (p. 59)

である。右の中にいふ傾城達磨の如き浮世繪の好畫題として屢々描かれたが、東京の神田鐳藏氏藏石川豐信筆の見立寒山拾得や、神戸の武岡豐太郎氏藏の堤山子筆傾城普賢菩薩圖の如きも同一の例として擧げることが出來る(浮世繪聚英參照)。

畢竟日本の近世は佛敎的起源のあらゆるものを世俗化せずにおかなかつたのであつて、風俗、言語等の諸方面に於ても同樣の過程を辿ることが出來るのである。たゞ私は佛敎文化の世俗化的過程として多少この點に觸れて見たにすぎぬ。なほ多く事例と論證の殘されてゐることは重々承知してゐるが、來るべき機會を待つことにして、一旦筆を收めておく。